

長野県の埋蔵文化財情報誌



辰野町沢尻東原遺跡出土土偶

信州の遺跡

第17号

新名所オープン

黒耀石体験ミュージアム「星くそ館」

長和町

ほしくそとうげこく よう せきげん さん ち
星糞峠黒耀石原産地遺跡

史跡星糞峠黒耀石原産地遺跡は、平成3年から継続的に行われた発掘調査によって、縄文時代における黒耀石の採掘の様子が徐々に解明されてきた。7月20日(火)にオープンした「黒耀石鉱山展示室『星くそ館』」では、特殊な剥ぎ取り技術によって現地に再現された地層の展示から縄文人の採掘の様子を体感することができる。

遺跡の中にある星くそ館と、その麓にある黒耀石体験ミュージアムは一体となって黒耀石の魅力を広く発信する役割を担っている。

(長和町教育委員会 太田光春)

※長和町では地域の伝統に則り「黒耀石」と表記するが、史跡名については常用漢字の「曜」の字を用いる。



縄文人が求めた火砕流起源の
白色火山灰層中の黒耀石

星くそ館は黒耀石体験ミュージアムから片道30分程度の遊歩道を歩いた遺跡内に位置する。



土砂崩れ防止の木製構造物（縄文時代後期）



館内では、地層に直接投影されるプロジェクションマッピングによって採掘の様子を知ることができる。

南信州の発掘調査から

飯田支所だより

ごろた 五郎田遺跡

最新調査成果から 1

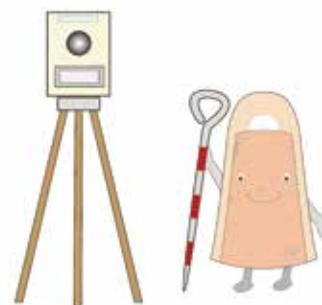
J R 東海によるリニア中央新幹線建設工事に伴い、昨年度の確認調査結果を踏まえて 4 月より本調査を開始している。リニア中央新幹線の本線部分としては飯田市内では初めての発掘調査となる。

遺跡は、天竜川が形成した低位段丘面に立地し、天竜川に合流する土曾川に沿う細長い微高地上に立地する。

昨年度の確認調査により、調査範囲全体に遺構が多く存在していることが把握できたが、それを踏まえて今年度は 1,880 m²の本調査を行っている。これまでに弥生時代から平安時代までの竪穴建物跡や掘立柱建物跡をはじめとした遺構を確認しており、規模の大きな集落遺跡であることが判明しつつある。竪穴建物跡は 20 軒以上が著しく重複してみつまっている。遺物には土器のほか、石斧や石鏃、石包丁などの出土がみられる。

同じ土曾川の東に位置する天竜川の低位段丘面上には伊那郡衙と推定される国史跡恒川官衙遺跡があり、土曾川対岸の堂垣外遺跡はその郡衙を支える有力集落と考えられている。このことから、五郎田遺跡も同様な性格をもつ集落である可能性が浮上してきている。

(遠藤恵実子)



五郎田遺跡の調査状況

リニア中央新幹線関連事業をはじめとする南信州の各種開発に伴う発掘調査については、平成 31 年 4 月に開所した飯田支所が担当している。開所 3 年目の今年度は支所長以下 7 名の職員体制で業務にあたり、現在は、飯田市座光寺地区に所在する 2 つの遺跡の発掘調査を行っている。



ざこうじいしはら 座光寺石原遺跡

最新調査成果から 2



ナギジリ2号古墳 横穴式石室

飯田建設事務所による、中央自動車道の座光寺スマートインターから国道 153 号を結ぶ、座光寺上郷道路建設事業に伴い、令和 2 年度から発掘調査を進めている。

遺跡は、土曾川中流域の谷部に位置する。縄文～古墳時代、平安時代～近世の遺物散布地であり、平成 9 年に飯田市教育委員会により発掘調査されたナギジリ 1 号古墳をはじめとした古墳分布域としても知られている。

昨年度の発掘調査では、古墳時代の竪穴建物跡や平安時代の土坑、時期不明の集石炉などがみつかった。また、古墳比定地に近い調査区では、辻金具や鉄鏃、耳環、勾玉、ガラス小玉などが出土しており、周辺に古墳が存在した可能性を示している。



昨年度発見された集石炉

た可能性を示している。

今年度の調査対象面積は 12,430 m² であり、そのなかには古墳比定地も含まれており、6 月にはナギジリ 2 号古墳の横穴式石室が姿をあらわした。墳丘上部は失われているが、石室の遺存状態は良好であると推測できる。今後は天井石の除去から石室内の調査へ進む予定である。

座光寺上郷道路関係では、今年度この他にも 2 遺跡の発掘調査を予定している。

(伊藤 愛)

信州の近代遺跡



平成 31 年 4 月の文化財保護法の改正を受けて、長野県教育委員会では文化財の総合的把握を推進するために、まず埋蔵文化財としての近代遺跡の把握を進めている。

長野県内において現在、周知の埋蔵文化財包蔵地となっている近代遺跡には、窯跡が最も多く、鉱山関連遺跡、役所跡、戦争関連施設跡などがある。近代遺跡は、現在の社会と直結する部分も多く、長野県では蚕糸、鉄道、公共施設等が相互に関連し、地域の歴史を物語る可能性が高い。

しかし、近代遺跡の把握にあたっては課題も多い。とくに近代遺跡は現代も機能を維持しているものもあり、その正確な把握と調査方法の検討が今後の課題となる。



市道柳原117号線 石標（大正時代）

写真の石標は、長野市小島・柳原遺跡群を横断する市道柳原 117 号線の脇に建っていたもので、『長野市誌第 8 巻』にも由来が記載されている。

この市道は、善光寺往来道とも呼ばれ、長らく堤防としても利用され、自然溢水させることにより水害の集中を避けてきた。大正年間に建てられたこの石標は、刻まれた水平線より高い工作物等を設置しないことが取り決められており、現在も道路はこの水平線を超えないように維持されてきた。

そのためこの石標は、道路の標高など現代の構造物まで含めて記録することによって正確な位置づけができる。相対的な位置関係の記録を重視する考古学の手法によって、現代と近代を記録によって結びつけることができる事例である。

（長野県教育委員会 石丸敦史）



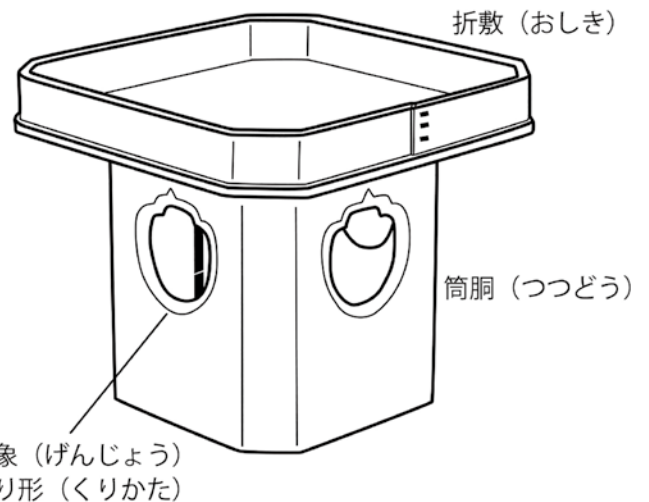
長谷鶴前遺跡群の堀跡（室町～戦国時代）から見つかった木製品は、「三方（三宝）」と呼ばれる供物などを載せるための台の脚部（「筒胴」）である。三面に宝珠形の意匠がみられ、薄い板材は折り曲げて筒状にするために内面に刻みを施し、樹皮で留められている。

長野県内の発掘調査で「三方」の出土事例はなく、全国に目を向けても少ない。現在は主に神事などで使われる「三方」であるが、当時はどのような場面で使われていたのか。まだまだ謎は多い。

（長野県立歴史館 柴田 洋孝）



【三方（さんぼう・さんぼう）】



埋文本棚



1700年代半ばに「乱暴な宝探し」として始まった発掘が、約250年間で「考古学」という科学として整備されていく歴史が1冊にまとまっている。シュリーマン、ハワード・カーター等、日本の一般読者にも馴染みのある人物や、ウィンケルマン、トムセン、モンテリウス等の考古学の基礎的研究法を確立した人物、ポストプロセス考古学において著名なイアン・ホッダー等、彼らの人物像や研究姿勢、そして今日の考古学に与えた影響が各キャプチャーごとにわかりやすくまとめられている。本の邦題には「若い読者のため」とあるが、すべての考古学徒に、考古学の歴史を見つめなおす機会を与える最良の1冊である。

著者のブライアン・フェイガン氏は『古代文明と気候大変動』等、日本語に訳された著書を多くもち、カリフォルニア大学サンタバーバラ校で教鞭をとった人物である。考古学を学生および一般読者にわかりやすく届けることに情熱を注ぐ著者の想いが、本書には込められている。

（村井大海）



『若い読者のための考古学史』
ブライアン・フェイガン著 広瀬恭子訳
すばる舎

伊那と諏訪の交流

～辰野町沢尻東原遺跡～

辰野町沢尻東原遺跡からは、頸の部分が長く、縦に細い線を平行に描く地元伊那谷の土器と、粘土紐を用いて立体的に飾る諏訪の土器が多く出土している。5000 年前にも伊那谷と諏訪の交流が盛んだったことを示している。(廣田和穂)



左：諏訪の土器 右：伊那の土器

れき いし きょう づか

礫石経塚に埋納された和鏡

わ きょう

～下諏訪町ふじ塚遺跡～

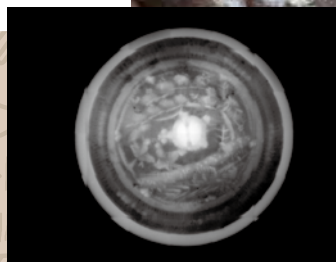
つか

墨で法華経などの経文を書いた石を礫石経と言う。ふじ塚遺跡では、約 40,000 点納められた中世末から近世初頭の礫石経塚が発見され、松・笹・鳥などが描かれた和風の鏡（和鏡）が出土した。当時の人は、神仏から恩恵を受けるために礫石経塚を造営し、和鏡を埋納して何らかの祈りを込めたものと思われる。(河西克造)



和鏡の出土状況

和鏡のX線写真
(県立歴史館で撮影)



埋文
展示

北陸・東北の土器

～長野市塩崎遺跡群～

しおざき

塩崎遺跡群では、弥生時代後期の北陸や東北南部地方とそっくりな土器が出土した。土器に使われた土から、運びこまれた土器と、遺跡周辺で作られた土器があり、当時の人の移動や交流を物語っていると考えられる。(市川隆之)



東北南部地方の土器と似た土器



北陸地方の土器と似た土器
(中央は北陸地方から運びこまれた土器)

広域な文化交流

～朝日村氏神遺跡～ うじがみ

縄文時代中期初頭（五領ヶ台Ⅰ式並行期）の竪穴建物跡から関西の鷹島式土器、東海地方および北陸地方の土器、北アルプスを越えた岐阜県に原産地をもつ下呂石で作られた石器が出土し、広域な文化交流圏を垣間見ることができる。（村井大海）



上段と下段右：北陸系土器 右：下呂石製石器
下段左：鷹島式土器

弥生時代の交流ルート

～中野市南大原遺跡～ みなみおおはら



山を越え川に沿って他地域と交流を深めた
信州の弥生遺跡（写真中央が調査地、中央左が上今井橋）

千曲川に架かる上今井橋は、日本海と信州北部を結ぶ重要なルート上にある。その橋のたもとで行った発掘調査では、およそ2千年前、ここに集落が営まれていた弥生時代から東北地方などの遠隔地と交流があったことを物語る土器が出土した。（柳澤 亮）



同心円文が特徴的な
東北地方南部の土器

ほう けい しゅう こう ぼ

方形周溝墓と北陸の土器

～長野市浅川扇状地遺跡群～ あさかわせんじょうち



出土状況（手前右側）

弥生時代後期終末期の方形周溝墓から出土した土器である。北陸地方の甕の形態を取り入れているが、外面は赤色塗彩が施され在地の土器の伝統を受け継いでいる。他地域との文化的な交流を図りながらも地域の伝統を重視する、弥生時代の終わりごろの時代の息吹が感じられる1点である。（西 香子）



北陸地方の影響を受けた土器

長野県で旧石器・縄文時代の遺跡を発掘するとキラキラと耀く黒曜石が出土する遺跡が多い。黒曜石は火山岩であるが、生成される火山は限られる。本州の中央部関東甲信地方には旧石器・縄文時代の遺跡が多い。ちなみに世界遺産に申請された北海道ほか 4 道県の両時代の遺跡数は 22017 か所に対して関東甲信地域の遺跡数は 39831 か所に上る（平成 28 年度文化庁調べ）。この地域の黒曜石産地は、栃木県高原山、伊豆箱根周辺、伊豆諸島の神津島、そして本州最大規模を誇る長野県和田峠から霧ヶ峰の標高 1500mを越える信州黒曜石原産地である。



信濃町野尻湖遺跡群^{おおくぼみ}大久保南遺跡の黒曜石集中

40点を超える剥片や石核が重なるように出土。それらは接合し、こぶし大強の2つの原石になった。和田鷹山産の黒曜石を3万年前の旧石器人は貯蔵していたのだろうか。

（写真：長野県埋蔵文化財センター2000大久保南遺跡報告書より）

黒曜石使用の始まりは 3 万数千年前にまでさかのぼる。長野県信濃町野尻湖遺跡群では遺跡から 90km ほど離れた原産地の黒曜石利用により、遺跡数が爆発的に増える。より良い石材への旧石器人のこだわりがあったようだ。旧石器時代終末期南牧村野辺山高原^{やでがわ}の矢出川遺跡群でも神津島産の黒曜石が相当量発見されている。信州黒曜石原産地のほうが近いのに神津島産に固執していたようだ。

縄文時代になると、青森県青森市三内丸山遺跡や北海道福島町館崎遺跡^{たてさき}や木古内町木古内幸連 5 遺跡^{きこないこうれん}など 600Km を越えて信州産の黒曜石製鏃が見つかる。これらはまさに最古の信州ブランドとして、縄文人のこだわりが感じられるのではないだろうか。

平成 30 年に山梨・長野両県にまたがる 14 市町村の縄文遺跡が「星降る中部高地の縄文世界」として日本遺産に認定された。中部高地には芸術的で個性豊かな土器や土偶が数多くみられるが、その文化を支えたのが本州最大の黒曜石鉱山と、黒曜石を広域に流通させた縄文人の、ものへのこだわりがあると見て取れる。数千年をさかのぼる信州の縄文人は、黒曜石にその魅力を見出し、広範な地域の人々と交流し、その魅力も共有した。

現代に生きる私たちも、この日本遺産を訪れ、縄文人と出会い、黒曜石の魅力を分けてもらってはいかがでしょうか。（大竹憲昭）

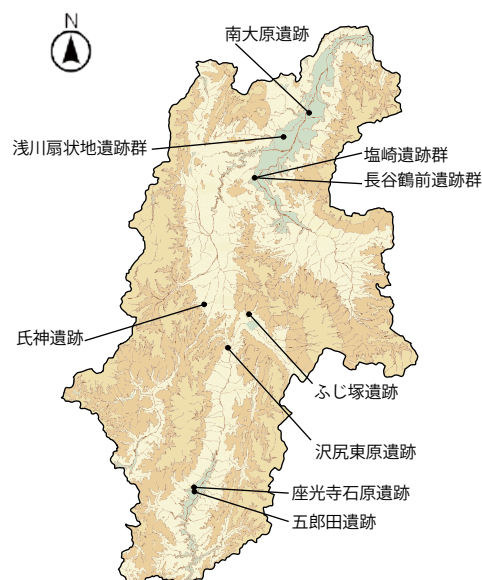
編集後記

本号では今年 7 月にオープンした長和町「星くそ館」、県教育委員会が把握をすすめる近代遺跡、その他、調査が本格化してきたリニア中央新幹線に係る発掘調査等について取り上げた。

特に屋外展示施設「星くそ館」は長期にわたる担当者のご尽力の賜物である。地域の宝となる施設の完成に心からの賛辞を、そしてそれを受継ぐ若手担当者にはエールを贈りたい。

（村井大海）

本号で掲載した遺跡位置



（一財）長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4
TEL 026-293-5926 FAX 026-293-8157
<http://naganomaibun.or.jp/> 印刷：奥山印刷工業株式会社

この冊子は、令和 3 年度 地域の特徴ある埋蔵文化財活用事業で作成しました。